十訓抄

編者

序文の結びに、建長四（一二五二）年十月、京の東山に草庵を営む翁が編んだと記されているが、この「翁」が、誰かについては、菅原為長（「正徹物語」の記事による）、橘成季（「古今著聞集」の編者）、六波羅二臈左衛門入道（妙覚寺本の奥書による）などの説がある。今日、第三説が有力視されているが、その人物の詳細は分かっていない。紀伊の湯浅氏の長老で、六波羅探題に出仕して左衛門尉に任じた湯浅宗業、後に出家して智眼と号した人物であろうとする説（永井義憲）がある。

出典

▼底本

新編日本古典文学全集「十訓抄」（浅見和彦校注、平成九〔一九七〕年、小学館）によった。

▼成立・内容

「十訓抄」は、鎌倉時代中頃成立した説話集。三巻。ジックンショウとも読む。原本と特に変えたところはないが、表記や段落の立て方などについては、教科書としての統一した体裁に改めた。

「日本書紀」をはじめとする史書・物語から教訓的な二百八十の説話を、「第一　人に恵を施すべき事」「第二　憍慢を離るべき事」「第三　人倫を侮らざる事」「第四　人の上を誡むべき事」「第五　朋友を撰ぶべき事」「第六　忠直を存ずべき事」「第七　思慮を専らにすべき事」「第八　諸事を堪忍すべき事」「第九　墾望を停むべき事」「第十　才芸を庶幾すべき事」の十か条の徳目に分類してあげたものである。人々の教戒のために説話を集めるという構想には、穏健で常識的な人柄が感じられるが、あげられた徳目にも啓蒙的な意図がよく表れている。集められた説話もその意図に沿って、王朝世界の善美を伝えるものと、実際的な処世の知恵や教訓につながるものとが主たる内容となっている。

「大江山」は「十訓抄」「第三　人倫を侮らざる事」の第一話である。この話は当時から有名だったようで、「金葉和歌集」及びその撰者源俊頼の歌論書「俊頼髄脳」に見え、「袋草子」「古今著聞集」などにもほぼ同文で採られている。

参考文献

❊ 教師用

▽注釈書

「十訓抄」（学灯文庫）峯村文人　学燈社　昭三十五
「十訓抄」増補改訂版（岩波文庫）永積安明　岩波書店　昭五十八
「新編日本古典文学全集　十訓抄」浅見和彦　小学館　平九

▽研究書・研究案内

「日本の説話　1〜7・別巻」市古貞次他　東京美術　昭四十八〜五十一
「論纂　説話と説話文学」久保田淳他編　笠間書院　昭五十四
「説話文学の構想と伝承」志村有弘　明治書院　昭五十七
研究資料日本古典文学「説話文学」　明治書院　昭五十九

※生徒用

「十訓抄・古今著聞集要解」高橋貢　有精堂　昭四十八
「十訓抄・古今著聞集」長瀬治　旺文社　昭五十二
『陰陽師』（文春文庫）夢枕獏　文藝春秋　平三
「源博雅の龍笛　蘇る最古の笛譜」長谷川景光　フォンテック（録音資料）　平十三
「宇治拾遺物語・十訓抄（日本の古典をよむ）」小林保治・増古和子・浅見和彦　小学館　平十九